

## 〔資料紹介〕田辺尚雄の南洋調査ノート

著者	石村 智
雑誌名	無形文化遺産研究報告
号	11
ページ	115-124
発行年	2017-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1440/00003184/">http://id.nii.ac.jp/1440/00003184/</a>



# 〔資料紹介〕 田辺尚雄の南洋調査ノート

石 村 智

## 1. はじめに

田辺尚雄（1883-1984）は、東京帝国大学や東京音楽学校などで教鞭をとった音楽学者であり、日本で初めて東洋音楽の概説をまとめたことでも知られる。昭和9年（1934）には南洋庁の委嘱を受け、南洋群島における伝統的な音楽・舞踊の調査をおこない、その成果は東洋音楽選書『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』の中に収められている<sup>1)</sup>。

このたび田辺の南洋群島調査に関連するノートの存在が明らかになったため、ここでその内容を紹介することとしたい<sup>2)</sup>。

## 2. 田辺尚雄の南洋調査

田辺尚雄は昭和9年（1934）の8月から9月にかけて、当時わが国の委任統治下に置かれていた南洋群島のうち、パラオ・カロリン諸島・ポナペ（ポーンペイ）・クサイ（コスラエ）・マーシャル諸島における伝統的な音楽・舞踊の現地調査をおこなった。この調査は南洋群島の行政機関である南洋庁の委嘱によっておこなわれ、報告書として提出される予定であったが、その後、第二次世界大戦が勃発し、敗戦とともに南洋庁も廃止されたため、しばらくその成果が公表されることはなかった。しかし昭和43年（1968）に、氏が代表をつとめていた東洋音楽学会から東洋音楽選書の第5巻として『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』が出版され、その中に調査の内容が収録された（田辺 前掲書）。また調査時に氏によって収録された録音は、昭和53年（1978）にLPレコード『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』の中に収められた<sup>3)</sup>。

調査の経緯については『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』および『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』の解説<sup>4)</sup>に詳しいのでここでは割愛するが、氏は調査にあたって南洋群島に関連する書籍を数多く手元に取り寄せて研究していたようである。とりわけ氏が参考にしたのは、氏が昭和9年（1934）春に古書店で入手した鈴木経勲著『南洋探検実記』（1892年）<sup>5)</sup>と、氏が調査旅行時に訪問したポナペ（ポーンペイ）で牧野三好から提供された『旧慣調査報告書：ポナペ島に於ける親族及相続に関する事項』といった文献であった。特に後者は、ポナペ（ポーンペイ）で南洋庁ポナペ地方法院長をつとめ、南洋庁旧慣調査委員もつとめた牧野が昭和8年（1933）3月下旬に脱稿したもので、田辺がこの文献を入手した当時は未公表の報告書であり、最新の情報であったといえる。なお本報告書は昭和14年（1939）に南洋庁により出版された『南洋群島々民旧慣調査報告書』<sup>6)</sup>の中に収録されている。

さて本稿で扱うノートであるが、基本的には田辺が収集した文献の抜き書きであり、自身の手による記述などはほとんど含まれていない。しかし本ノートで抜き書きされている文献を見ることで、田辺が調査にあたってどのような文献を参照し、またどのような興味を持って抜き書きをおこなったか

を知ることができる証拠であり、資料的な価値は高いと考える。以下では、その内容について紹介することとする。

### 3. 南洋調査ノートの内容

本ノートはB6版サイズの市販のノート（Y. H. & Co. 製）であり、全96頁である。以下では頁ごとに書かれている内容を、順を追って示していく。

表紙：

表題に「Notes on music and dances in Melanesia & Polynesia」、名前欄に「Prof. Hisao Tanabe」と記す。

1～2頁：

空白

3頁：

表題「南洋群島総論」

フレデリック・スタール著 [津田敬武訳] 『世界人種物語』(1924年)<sup>7)</sup> 第34章「ミクロネシア人」より、舞踊に関する記述(225頁13行目～226頁3行目)の抜き書き

4頁：

空白

5～46頁：

表題「昭和八年三月下旬脱稿 旧慣調査報告書 [ポナペ島に於ける親族及相続に関する事項] 南洋庁旧慣調査委員 牧野三好」

牧野三好著『旧慣調査報告書：ポナペ島に於ける親族及相続に関する事項』からの抜き書き（以下、便宜的に南洋庁編『南洋群島々民旧慣調査報告書』（1939年）の頁数を参照しながら内容を示す）

5頁～13頁前半：

「初編 親族 第一章 社会制度 第一項 伝説と社会制度の沿革 第一款 神人の渡来とポナペ島の創造」(300頁13行目～307頁10行目)の抜き書き

13頁後半～18頁前半：

「第二款 氏族 (シャウ Jau)」(307頁11行目～309頁2行目、310頁15行目～316頁10行目)の抜き書き

18頁後半～20頁：

「第三款 ペイ祭祀祈祷及ウエイ」(316頁11行目～319頁10行目)の抜き書き

21頁前半～27頁前半：

「第四款 ナンマタルの遺跡」(319頁11行目～15行目、329頁16行目～338頁5行目)の抜き書き

27頁前半～34頁前半：

「第五款 シャウテレウル」(341頁3行目～343頁14行目、345頁2行目～349頁17行目)の抜き書き

34頁後半～41頁前半：

「第六款 シャウテレウル王朝滅亡」(350頁1行目～356頁12行目)の抜き書き

41頁後半～46頁：

「第七款 イショケケケル」(356頁13行目～361頁17行目)の抜き書き

47～48頁：

この箇所のみ、出典が不明である。また部分的にローマ字で記されている点も他の箇所とは異なる。おそらく田辺が伝聞したところを書き留めたものである可能性が高い。一部、文字が消えかかっており判別し難いところもあったが、読み取れる内容を下にそのまま示すこととする。なお文中にある「Jaluit」はヤルト島のことを指し、「Kanaka」は南洋群島の先住民一般のことを指すと考えられる。

Jaluit dewa Onna ga Ueni nari, Climax ni tassuru toki Otoko no M ga orete sinu koto ga ôkuaru.

Yobai ni yuku toki tokushu no Bô wo motte yuki, sorede tutuku to onna wa sorewo sawatte mite dare ga kita ka ga wakaru.

Chinkyaku ni saikun wo teikyô suru, Teishu wa sono Bed no shita de nete, oto wo kiite yorokobu.

Kanaka no onna ga nihonjin to suruto, go meiyo to omotte sakanni iifurasu. Sono onna ga machi de jibunno shita otoko (nihonjin) ni auto, yubisashite ano hito to shita to ookina koe de minna ni jimanrashiku iu.

Shikata wo oshieru onna no sensei ga iru. Aru nihonjin ga sono 先生ヲ尋ネテ終ツタラ、沢山、女ガ出テ来テ自分が先生ダト言ツタ。其ノ中ノ一人ヲ擇ンデシ方ヲ上手ニ教ヘテ呉レタ（色々ナtechnicヲ）五円ノ札ヲ置イテ帰ツタ、其翌朝カラ毎々女ガソノ男ノ所へ来テ、タダデモヨイカラ教ヘルト言ツテ困ツタ。（土人ノ女ハ勢力ガ強イノデ困ツタトイフ）

○マーシャルデハ女ガ技巧ガウマイ（トラックハ男ガ技巧派）。女ハ身体ヲ動かサズ局部ノミヲ微妙に動かス。

49～50頁：

表題「メラネシア—フィジー」

49頁前半：

『世界人種物語』第35章「メラネシア人」より、フィジー人に関する記述（232頁7～10行目、230頁9行目および231頁1～2行目）の抜き書き

49頁後半～50頁前半：

鈴木経勲著『南洋探検実記』「ヒージー島の記」より、フィジー人の舞踊と歌に関する記述（283頁10行目～285頁8行目）の抜き書き

50頁後半：

門馬直衛著『舞踏史a』(1934年)<sup>8)</sup>「原始人の舞踏」よりフィジー人の舞踊に関する記述(26頁26～27行目)の抜き書き

雑誌『音楽教育』(大日本出版)第5巻第3号(1943年)所収R・ヴァルラシエク著[小泉治訳]「原始音楽(13)」<sup>9)</sup>よりフィジー人の歌に関する記述(83頁下段5～8行目)の抜き書き

51～56頁：

『旧慣調査報告書：ポナペ島に於ける親族及相続に関する事項』からの抜き書き(続き)

51頁～53頁前半：

「第七款 イショケレケル」(362頁1行目～365頁4行目)の抜き書き(内容的には46頁までの抜き書きの続き)

53頁後半～56頁：

「第八款 イショケレケル時代以後のポナペの状態」(365頁5行目～369頁1行目)の抜き書き(内容的には文の途中で途切れている)

57～60頁：

表題「メラネシアーソロモン」

57頁前半：

『世界人種物語』第35章「メラネシア人」より、横笛と口琴を吹くソロモン諸島の住人の挿絵(228頁)の模写

57頁後半～60頁：

『南洋探検実記』「ヒージー島の記」よりソロモン諸島の舞踊と音楽に関する記述(279頁10行目～283頁9行目)の抜き書き

61～72頁：

『旧慣調査報告書：ポナペ島に於ける親族及相続に関する事項』からの抜き書き(続き)

61頁前半：

「第八款 イショケレケル時代以後のポナペの状態」(『報告書』369頁1～5行目)の抜き書き(56頁において内容が途切れていたものの続き)

61頁後半～68頁前半：

「第二項 現存社会制度 第一款 称号」(371頁9行目～383頁16行目)の抜き書き

なお63頁の前半には唐突に、「メラネシア-New Britain(後頁にあり)」と書かれ、ニューブリテン島の火の踊りを踊る人物の挿絵が描かれている。この挿絵は『世界の人種 上』(1932年)<sup>10)</sup>43頁の写真を模写したものである(図1)

68頁後半～70頁前半：

「第二款 統治機関」(383頁17行目～386頁6行目)の抜き書き

70頁後半～71頁：

「第三款 ナンマルキー及ナニケン継承の順位」(386頁7行目～388頁3行目)の抜き書き  
72頁:

「第四款 ナンマルキー等の世襲財産」(388頁4行目～13行目)の抜き書き(内容的には文の途中で途切れており、以下は余白となっている)

73～77頁:

表題「ポリネシア—サモア」

73頁:

『南洋探検実記』「サモア島の記」より、サモアの楽器に関する記述(235頁13行目～237頁10行目)の抜き書き

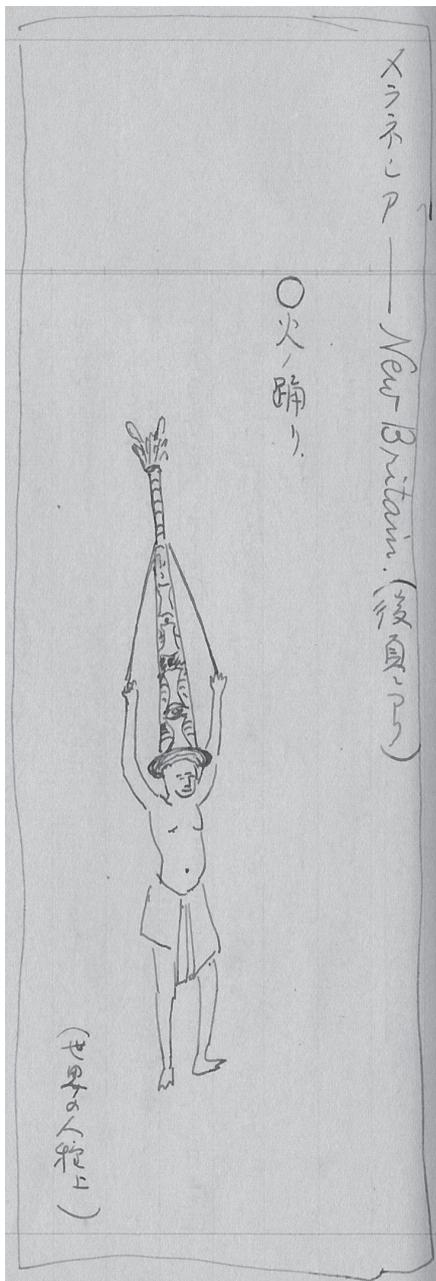


図1 『世界の人種上』43頁の写真(右)と、田辺によって書き写された挿絵(左)

74頁前半：

『南洋探検実記』「サモア島の記」より食人に関する記述（238頁3～5行目）および伝統的飲料「カバ」の作法に関する記述（344頁2～3行目および344頁13行目～345頁2行目）の抜き書き

74頁後半～77頁：

『南洋探検実記』「サモア島の記」よりサモア人の舞踊と歌に関する記述（250頁3行目～255頁2行目）の抜き書き

78～82頁：

空白

83～84頁：

表題「ボルネオ、セレベス、ニューギニア」

83頁前半：

『音楽教育』「原始音楽（13）」より、セレベスとニューギニアの間にあるブルウ島の音楽に関する記述（80頁下段21行目～81頁上段8行目）およびニューギニアのフルートに関する記述（80頁上段19～20行目）の抜き書き

83頁後半～84頁：

『音楽教育』「原始音楽（13）」より、ニューギニアとニューブリテン島の楽器に関する記述（81頁下段4～15行目）の抜き書き

85～90頁：

空白

91頁：

表題「ギルバート島」

松岡静雄著『ミクロネシア民族誌』（1927年）<sup>11）</sup>「後編 第一章 見飾」よりギルバート諸島（キリバス）の紐帯に関する記述（426頁11～13行目）の抜き書き

92～96頁：

空白

#### 4. 南洋群島調査ノートの資料的考察

以下ではこの南洋群島調査ノートの内容について、いくつかの点について考察を試みることにしたい。

##### ・南洋群島調査ノートの作成時期

このノートに抜き書きされた文献の多くは田辺の南洋群島での現地調査が実施された昭和9年

(1934) 以前に刊行されたものであり、また田辺が調査時にポナペ (ポーンペイ) で入手した『旧慣調査報告書：ポナペ島に於ける親族及相続に関する事項』が含まれることから、南洋調査の途中もしくは直後にその大部分が書かれた可能性が高い。

しかしその中に、昭和18年 (1943) に発表された雑誌『音楽教育』第5巻第3号所収の論文「原始音楽 (13)」が含まれていることから、南洋調査よりもかなり後の時期に書かれたものである可能性も示唆される。

しかしこの文献が抜き書きされた箇所を注意深く見ると、他の文献の抜き書きよりも後の段階で書き加えられたものである可能性が示される。まず50頁の該当箇所であるが、『舞踏史a』からの抜き書きの左側に、上段にはみ出して「原始音楽 (13)」の抜き書きが書かれており、また使用されているインクの濃度が前後のものより若干薄い (図2)。次に83～84頁の該当箇所であるが、72～82頁の空白をはさんで書かれている。こうしたことから、「原始音楽 (13)」の抜き書きは、その他の文献の抜き書きが書かれた後の段階に書き足されたものである可能性が高いといえる。こうしたことから、田辺は南洋庁へ提出する報告書をまとめるにあたって、戦時中の時期においても追加の文献調査をおこなっていたものと思われる。

田辺によると、南洋群島の調査報告書を「南洋庁に提出しようとしている間に戦争が勃発し、東京はアメリカの飛行機の空襲下にさらされる危険に立ち至ったので、私の家の庭に臨時に設けた防空壕の中にたくさんの資料」を埋めておいた、という<sup>12)</sup>。こうした証言からも、戦時中に至るまで田辺が報告書の準備を進めていたと思われるのである。

・ポナペ (ポーンペイ) の民族誌関連の抜き書きについて

この南洋群島調査ノートの大部分を占めるのが、牧野三好による『旧慣調査報告書：ポナペ島に於ける親族及相続に関する事項』からの抜き書きである。しかも他の文献に関しては音楽と舞踊に関する箇所を選択的に抜き書きしているのに対し、ここでは直接音楽や舞踊に関係がないように思える、ポナペ (ポーンペイ) の民族誌的な記述

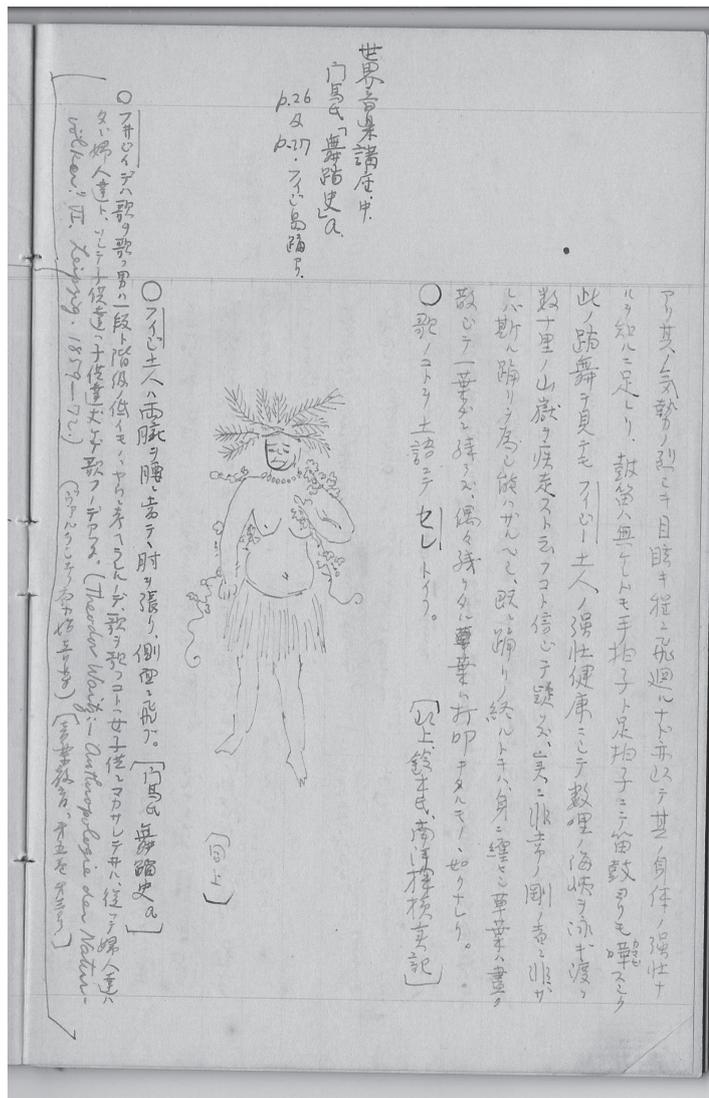


図2 南洋調査ノート50頁における抜き書きの様子

を抜き書きしている。

特に興味深いのがナンマトル（ナン・マドール）遺跡に関する抜き書きである。ナンマトル遺跡は、玄武岩の巨石石材などによって構築された大小90以上の人工島よりなる、先史時代の壮大な都市遺跡で、しばしば「太平洋のヴェニス」と称される<sup>13)</sup>。ナンマトル遺跡はポナペ（ポーンペイ）がドイツの植民地であった19世紀頃からその存在が知られており、日本統治時代には人類学者の長谷部言人や考古学者の八幡一郎がここを訪れるなど、当時の日本においてもよく知られた存在であったようである。ナンマトル遺跡の地図などの挿図も丁寧に書き写されており、田辺の几帳面さをうかがい知ることができる。

田辺は『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』に南洋群島調査の報告を収録するにあたり、ポナペ（ポーンペイ）の民族誌的記述を長文にわたって掲載している<sup>14)</sup>。これについて田辺は「音楽舞踊に直接関係なき「シャウテレル王朝滅亡」の項をここに掲載したことは、ポナペ古代史の状況を述べて、当時の島民の生活の模様を示し、間接にその芸能の性質をあきらかにしようと考えたからである」と述べている<sup>15)</sup>。

なお本ノートにおけるポナペ（ポーンペイ）の抜き書きは、5～46頁、51～56頁、61～72頁と分かれて書かれており、途中には別の文献の抜き書きが挿入されて前後の内容が分断されているのに加え、最後は中途半端なところで途切れている。なぜこのような形で抜き書きをおこなったのかは不明であるが、本ノートの作成の様子がうかがい知れる興味深い事象である。

#### ・性的な事柄に関する記述について

本ノートの47～48頁にある記述は、出典が不明であり、一部がローマ字で書かれるなど、他の箇所とは異質である。内容は、性的な習俗や噂話であり、その内容をはばかってローマ字で記すなどの配慮をしたものと推察される。

しかし田辺自身は、音楽や舞踊に関して「風俗上有害と認められているものでも、研究の必要上今回限り許可されたいこと」を南洋庁に要求している<sup>16)</sup>。また「島民は舞踊と性生活をもっとも喜び、常にこの二つが結びついている。舞踊それ自身に性的なものもすこぶる多い（トラック島の踊はとくにこの点がはなはだしい）。また中には性と離れた踊でも、男女相共に行うので親密になりやすく、したがって踊の後に性行為が多く行われる」と述べている<sup>17)</sup>。実際に彼が収集し、収録したトラック（チューク）の歌の内容は性的なものが多い。

性的な内容の情報も積極的に収集しようとする田辺の態度がうかがい知れる興味深い記述である。

## 5. おわりに

この南洋群島調査ノートは、内容自体は基本的に既存の文献からの抜き書きであり、これまで知られていなかった情報が書かれていたわけではない。しかしながら田辺が南洋群島における調査成果をまとめるにあたり、どのような文献を参照し、またどのような興味を持って抜き書きをおこなったかをうかがい知ることができる資料でもある。

田辺は東洋音楽を本格的に研究した草分け的存在であるが、日本・中国・朝鮮といった東アジアのみならず、南洋群島や台湾、樺太（サハリン）といった、いわゆる「周縁」地域においても現地調査をおこない、多くの資料を収集するフィールドワーカーでもあった。本資料は、そうした田辺の学問的態度を知る上でも重要であるといえよう。

#### 謝辞

貴重な資料をご提供いただいた田辺光雄氏に感謝申し上げます。また資料の整理を手伝っていただいた今枝紘子さんに御礼申し上げます。

#### 《注》

- 1) 東洋音楽学会編『南洋・台湾・沖縄音楽紀行』音楽之友社 1968年
- 2) 本ノートは田辺尚雄の遺族である田辺光雄氏より飯島満（無形文化遺産部部長）に提供され、石村がその内容を調査した。なお本ノートの内容はデジタルスキャンされ、本研究所に保管されている。
- 3) LPレコード『南洋・台湾・樺太諸民族の音楽』（録音・調査：田辺尚雄、企画・監修：田辺秀雄）東芝EMI株式会社 1978年
- 4) 前掲LPレコード解説書（田辺尚雄「台湾・樺太・南洋の旅」および田辺秀雄「解説」）
- 5) 鈴木経勲『南洋探検実記』博文館 1892年
- 6) 南洋庁編『南洋群島々民旧慣調査報告書』南洋庁 1939年
- 7) フレデリック・スタール著 [津田敬武訳]『世界人種物語』厚生閣書店 1924年
- 8) 門馬直衛『舞踏史a』松柏館書店 1934年
- 9) R・ヴァルラシエ著 [小泉治訳]「原始音楽 (13)」『音楽教育』第5巻第3号 大日本出版 1943年
- 10) コンサイス科学叢書第91『世界の人種 上』木村書房 1932年
- 11) 松岡静雄『ミクロネシア民族誌』岡書院 1927年
- 12) 注i文献 125頁
- 13) 2016年7月にユネスコ世界文化遺産に登録された。
- 14) 注i文献 103-117頁
- 15) 注i文献 117頁
- 16) 注i文献 29頁
- 17) 注i文献 26頁

Notebook on the Investigation in the South Sea Islands  
by TANABE Hisao

ISHIMURA Tomo

The musicologist TANABE Hisao conducted investigation of traditional music and dance of the South Sea Islands (Nanyo-gunto), what is now Micronesia, in 1934 on commission from Nanyo-cho, the then government office of the South Sea Islands. The Department of Intangible Cultural Heritage received from TANABE's surviving family a field notebook written by TANABE during this investigation. An examination of the notebook revealed that most of its contents were excerpts from ethnographical materials concerning the South Sea Islands. Although there was very little entry about TANABE's own investigation, analysis of this notebook showed that TANABE placed importance on ethnographical information that he collected in his investigation.